

小野健商店土蔵

昭和大火後（昭和4年）の土蔵です。伝統的な土蔵建築で、海鼠壁や鰻絵などの凝った造りがみられます。現在地での創業は大正5年。魚問屋、マグロ船の経営、仲買をしていました。明治時代は魚町にあったといひます。屋号はマルヤマコで、先々代の小野寺健之助さんの頭文字を頂き店名にしたといひます。

震災では外壁がはがれ装飾が破損するなどの大きな被害を受けました。SOC 基金により応急の壁工事が行われ平成29年6月に修復が完了しました。



被災前



被災後

武山米店店舗・主屋

昭和大火後の米店兼住宅です。町家のように、表に銅板を貼り装飾的な造りにしています。実はこの家の敷地は扇形。敷地に合わせたとても凝った造りです。創業は明治初期。大正・昭和の大火に遭遇しましたが、引き続きこの地で米穀商を営んでいました。初代が結婚記念で購入したという精工舎製（現 SEIKO）の柱時計は被災後、一度市内の河原田の店舗に移され、再建後は魚町に戻って時を刻んでいるそうです。屋号は「ヤマゴ」。

震災では一階部分が津波で大きくさらわれました。SOC 基金等により応急の補強工事が行われ、平成30年4月に再建しました。



被災前



被災後

三事堂ささ木店舗・土蔵

大正期の陶器店兼住宅、土蔵です。数少ない昭和大火前の建物になります。土蔵と洋風建築を並べた和洋折衷のデザインが特徴です。創業は明治41年。商売の創業は先々代の佐々木三治（事）さんです。山に「ニ」でヤマニの屋号は、さらに上を目指す意で、三治さんの「三」を山に見立て、その中に「ニ」を入れて、掛けてあるとのこと。

震災で外部の海鼠壁や内部に被害を受けました。

平成29年6月に修復が完了しました。



被災前



被災後

角星店舗

昭和大火後の酒店です。魚町の屋号通りに面し、歴史的町並みを形成していました。伝統的な塗り家造りとなっています。この家も敷地が平行四辺形と不整形なのですが、海側に正面を向けるため、瓦や腕木に角度をつけています。創業は明治38年。創業時、折壁室根神社に清酒を榊に入れて献上したところ、明けの明星が御神鏡にうつり、その光が献上の酒に丸やかに輝き、屋号を角星と決めたそうです。銘柄は、陸中、陸前の両国にまたがっての酒屋であるため「両国」としたそうです。

震災で一階部分が流され、二階も敷地の奥に流されました。SOC 基金により、応急的に元の位置に曳き家して戻し、一度解体してから平成28年11月に再建しました。



被災前（気仙沼311 まるごとアーカイブ）



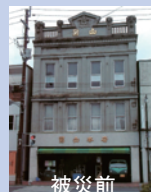
被災後

男山本店店舗

昭和大火後の酒店です。魚町の屋号通りに面し、歴史的町並みを形成していました。三階建ての古典様式調の建築です。沖の漁船から目立つパラペットの装飾と「男山」の屋号が印象的です。創業は1912年。小売り時代に塩竈阿部勘の「男山」を販売しており、自家清酒も「男山」「伏見正宗」としたそうです。

震災で漁船が衝突したようで、一、二階が破損し、三階だけが瓦礫の上に残されました。その様子は、震災の象徴として多くのメディアにも取り上げられたようです。SOC 基金により、応急的に元の位置に戻し養生し、その後、残された部材を丁寧に解体・保管し再建に使いました。

令和2年7月15日について店舗が開店しました。



被災前



被災後

千田家住宅主屋・土蔵・石蔵

主屋は昭和大火の後に建てられました。附属する石蔵と土蔵は大火を乗り越えた建物です。角地に建ち、交差点に対して大きくカーブを描いた壁面が特徴です。2階には丸窓が付き、煙突のような出窓が2階から3階パラペット上まで延び、船のイメージを漂わせています。角地を意識したデザイン、船のモチーフは、昭和初期の近代建築によくみられたものです。建物を建てたのは「富貞商店」といい、大正から昭和にかけて建設資材問屋を営んでいたそうです。戦前に千田家が所有し、縄やロープの製造販売、タクシー業などを営み、近年はテナントに利用されていました。屋号は「胆沢屋」。

震災で津波が2階まで浸水し内外に大きな被害を受けました。SOC 基金等により応急修理を施した後、実測調査、設計が行われ、建物を健全にする第一期工事が令和2年7月に終わりました。



被災前（気仙沼311 まるごとアーカイブ）



被災後